

# 聖ヨハネホスピス通信

ISSN 0919-0457



NO. 54

2010.12.20

発行 聖ヨハネホスピス

〒184-8511東京都小金井市桜町1-2-20 TEL 042-388-2888

巻頭言	渡邊 元子	1	ボランティア日誌	野中 英子	… 5-6
研究所だより					
ホスピス点描	近藤百合子 池田 順子	2-5 5	チャリティーコンサートのおしらせ		… 6

## 巻頭言

今まで経験したことのない猛暑の夏もやっと終わり、一息つく間もなく秋の気配を通り越してはや暖房が必要な季節となりました。期待のうちに完成した聖ヨハネホスピスも17年を迎えます。当初 国内で数少なかったホスピス病棟も現在は全国規模で広がってまいりました。同じホスピスと名乗りながら、施設間では考え方、理解の相違、温度差などがあるように感じます。

当聖ヨハネホスピスも時代とともに 医療の進歩に伴い 痛みのコントロール、処置など一つとりましても当初とは当然変わってきておりますが、変わらないもの、絶対に変えてはならないものは、聖ヨハネ会のいずれの施設にも共通する理念「病める人、苦しむ人、もっとも弱い人に奉仕します。」であり、このこころをわたしたち聖ヨハネ会の職員は生きようと努めています。

聖ヨハネホスピスにご入院なさる患者さまもご家族も、わたしたちが大切にしなければならない方々であり、こころを生きる場を与えてくださるのだと言えると思います。

ホスピスでは常に患者さまご本人が主体であり、ボランティアをも含む医療スタッフはそれぞれの

## 聖ヨハネ会 理事長 渡邊 元子

立場をわきまえてチームを組み、ご家族の意向も配慮しつつ 常に患者さまが快適に気持ちよくお過ごしになり、その方らしく生を全うなさるためのお手伝いを致しております。

日進月歩の医療現場でも、残念ながらまだすべてのがんが治る段階にはございません。いのちを脅かす病にご本人はもとよりご家族の今後の生活まで左右しかねない現在、聖ヨハネホスピスの力がお役にたてばと願っております。



↑ ボランティアによる手作りブローチ。クリスマスシーズンのチャリティーグッズです。  
5頁参照



## 研究所だより～納棺師が伝えてくれた、いのち～

聖ヨハネホスピスケア研究所 近藤 百合子

今回は9月に開催しました講演会についてご報告させていただきます。

ケアタウン小平との共催のもと、「いのちを語る」をテーマに開催しております講演会も、早いもので5回目を迎えました。今年は、アカデミー賞外国語映画賞受賞作品『おくりびと』の原案者である青木新門氏をお招きし、「いのち」の大切さについてお話をいただきました。

### ＜モックンとの出会い～映画『おくりびと』完成に至る裏話＞

皆様は、かつてのアイドル歌手“シブガキ隊”をご存知ですか？ヤックン・モックン・フックンの愛称で親しまれ、歌に踊りとお茶の間を賑わせていたグループです。その中のモックンこと“本木雅弘”さんが『おくりびと』制作の発起人だそうです。俳優に転身した以降に写真撮影でインドに訪れた際、本木さんは生と死が当たり前のように共存する凄まじい光景を目の当たりに大きな衝撃を受けたと同時に、偶然にもスタッフが持参していた青木新門氏の著書『納棺夫日記』を読み、感銘を受けたことをきっかけに映画作りがスタートしたことでした。その後10年余、本木さんはスタッフ集めや内容の構想を練り、青木氏や制作スタッフらと相談を重ね、ようやく台本が出来上がり青木氏のもとに送られてきます。

しかし、内容に目を通した青木氏は、本の内容との相違にカチン！ときてしまい、納得のいかない箇所への修正依頼を何度も試みるものを受け入れてもらえず、映画制作における一つの条件を出し、原作から自分の名前を外し、映画のタイトルを変更してもらうことで了承したという裏話を明かされました。『おくりびと』の原作者ではなく原案者として記すことをご希望されるのも、お話を聴いて納得でき、また『納棺夫日記』を書く上でこだわり、大切にしたものを持り通したいという青木氏の信念が伝わってくるような思いを感じました。ちなみに、映画の試写会をご覧になった青木氏は作品としての『おくりびと』に感動し、アカデミー賞受賞もひそかに予感していたそうです。

### くいのちの尊さについて～生い立ちから～

青木氏は富山県のご出身。5歳のときに満州に渡り、8歳で終戦を迎える、その後しばらくは難民キャンプで母親と3歳の妹との3人で暮らしていました。ところが、お母様が当時流行っていた発疹チフスに罹り別の収容所に隔離され、青木氏はマイナス20℃にもなるという極寒の地で、妹と2人だけで過ごすことになります。ある朝目覚めると、妹さんが隣で亡くなっていることに気づいたそうですが、どうしたらよいのか戸惑う中、同じキャンプ内にいた人たちに促され、一人で妹さんをおんぶして焼き場に連れて行き置いてきた、というご自身の体験を語られました。青木氏はそれ以来、その時のことを思い出すことも考えることもなく過ごしていたようですが、ある時、長崎の原爆の写真展で出会った一枚の写真に目が留まり、自分の過去の体験と全く同じその光景に、忘れていた過去が一気に甦り、その場で泣き崩れた



そうです。講演の中でも紹介されていた、青木氏にとって忘れられない一枚の写真が『焼き場に立つ少年』<sup>1)</sup>と題されたこの写真です。この写真を通して、青木氏は当時の様子を淡々と語られましたが、自分にとって大切な妹をあのような方法でしか葬れなかったことに今でも悔いる思いで一杯のよう、何とも切ない思いが私たちの胸に伝わり、涙を止めることができなかつたことを思い出します。 1)「shinmonの窓」

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shinmon/shin08.htm>

### ＜納棺師を辞めなかつたのは・・・＞

青木氏が納棺師になった経緯は、納棺夫日記をご覧いただくこととしてここでは省略させていただきます。納棺師として働き始めた当初、奥様はもちろん、友人、知人にも伝えず、周囲に悟られないように働いていたそうです。しかし、後に知

られてしまうのですが、やはり周囲の視線は厳しく、多くの人から偏見の目で見られていたそうです。青木氏ご自身も辞めようと思っていた矢先、あるお宅からご依頼を受け訪問すると、以前お付き合いしていた恋人の家であることがわかり、その時の様子を青木氏は『納棺夫日記』の中から次のように紹介されました。

「横浜へ嫁いだと風の便りに聞いていた。来ていないかも知れないと思い、意を決して入っていった。本人は見当たらなかった。ほっとして、湯灌を始めた。もう相当の数をこなし、誰が見てもプロと思うほど手際よくなっていた。しかし、汗だけは、最初の時と同様に、死体に向かって作業を始めた途端出てくる。父額の汗が落ちそうになったので、白衣の袖で額を拭こうとした時、いつの間にか座っていたのか、額を拭いてくれる女がいた。澄んだ大きな眼一杯に涙を溜めた彼女であった。作業が終わるまで横に座って、私の顔の汗を拭いていた。退去するとき、彼女の弟らしい喪主が両手をついて丁寧に礼を言った。その後ろに立ったままの彼女の目が、何かいっぱい語りかけているように思えてならなかつた。車に乗ってからも、涙を溜めた驚きの目が脳裏から離れなかつた。

しかしその驚きや涙の奥に、何かがあった。私の横に寄り添うように座って汗を拭き続けた行為も、普通の次元の行為ではない。彼女の夫も親族もみんなで見ている中での行為である。

軽蔑や哀れみや同情など微塵もない、男と女の関係を超えた、何かを感じた。

私の全存在がありのまま認められたように思えた。そう思うと嬉しくなった。この仕事をこのまま続けていけそうな気がした。」

青木氏は講演の中で、“死体を扱うような仕事に就いているということだけで親戚からは絶交され、妻や友人にも理解してもらえない日々の中で、彼女の優しい眼差しは、丸ごと認めてもらえた…”という実感が得られ、嬉しく、癒された。それを機に、納棺の仕事に就く際には白い服をピシッと着て臨むようにすると、たったそれだけのことでも社会的評価が随分違う。そして、着る物一枚で自分の仕事への意識が変わり、90歳を過ぎたお婆さ

んからは「私が死んだらあんた来てもらえるかね」と生前予約をいただけるようになった”などと話され、気持ちの持ち方一つで人生の歩み方は変わる、豊かになるということを教えて下さいました。

近年、若年者の凶悪犯罪を報じるニュースが絶えず、子供でさえも簡単に人や動物を殺してしまう時代に、日本の将来において不安を感じずにはいられません。青木氏も講演の中で触れておられましたが、9割が在宅で看取っていたという昔とは異なり、現在は9割が病院・施設で看取るという時代になりました。しかも学歴社会という背景も原因といえるのでしょうか、今の子供たちは家族の看取りの場面に立ち会うよりも学業優先の傾向があり、死とはどういうものか、また、人の死を通して“いのち”的の大切さ、尊さを学び、考える機会が少ない現状が、若年者の犯罪につながっている要因ではないかというお話をありました。ある14歳の少年が祖父を見取った際に書かれた感想文を紹介されました。「某君の高齢のいい人の「僕はおじいちゃんからいろんなことを教えてもらいました。特に大切なことを教えてもらったのは、おじいちゃんが亡くなる前の3日間でした。今までテレビなどで人が死ぬと、まわりの人が辛そうに泣いているのを見て、なんでそんなに悲しいのだろうかと思いました。しかし、いざ、おじいちゃんが亡くなろうとしているときに、僕はそばにいてとてもさびしく、つらく、かなしくて涙が止まりませんでした。その時、おじいちゃんは僕に、本当に人のいのちの尊さを教えてくださったような気がします。それに最後にどうしても忘れられないことがあります。それはおじいちゃんの顔です。それはおじいちゃんの遺体の笑顔です。とてもおおらかな笑顔でした。いつまでも僕を見守ってくれることを約束しておられるような笑顔でした。おじいちゃん、ありがとうございました。」この感想文を書いた少年と、一方で人や動物を簡単に殺してしまう同年代の少年との違いについて青木氏は、「人が亡くなる場にいることができたかどうかということ、人の死に立ち会うことで、五感で死を認識することができるのだ…」と語られ、今の社会で欠けている“いのちを大切にする”ことの意味を私たちに伝えてくださったように感じます。子供たちが死の場面に立ち会えるように

していくには、周りの大人たちがその意味の大切さを認識し環境を整えることが重要だと思います。死の場面に立ち会ってこそ、死は決して特別なことではないということや、子供なりに自分の生き方を見つめ、“いのち”を大切にすることのみならず、人としての本当の優しさをも育んでいくことにつながるのではないかでしょうか。教科書や学校では教わることのできない、人から人へつながっていく“いのちのバトンタッチ”を子供の時代から全身で学んでいくことが、人として生きていく上でとても大切なことを青木氏のお話から痛感させられました。

#### ＜“ありがとう”のことばの大切さ＞

皆様は『飛鳥へ、まだ見ぬ子へ』という一冊の本をご存知ですか？この本は、青木氏と同郷の井村和清さんという一人の医師が、30代という若さでがんによってこの世を去る直前まで綴られた日記です。これは井村先生ご自身が30年余、ここに生きたという証、自分のために泣いてくれた人々への感謝の言葉、そして長女の飛鳥ちゃんとこれから生まれ来る子供への、唯一の父親からの贈り物であり形見とするために書き上げられたものです。青木氏は、この本の一節を講演の中で紹介されました。井村先生ががんの手術を終えてしばらくした後、病院で検査をした際に全身に転移していることを知った日の晩の日記だそうです。

「肺への転移を知ったとき、覚悟はしていたものの、私の背中は一瞬凍りました。その転移巣はひとつやふたつではないのです。レントゲン室を出るとき、私は決心していました。歩けるところまで歩いていこう。その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとても明るいのです。スーパーへ来る買い物客が輝いてみえる。走りまわる子供たちが輝いてみえる。犬が、垂れはじめた稻穂が、雑草が、電柱が、小石までが輝いてみえるのです。アパートへ戻ってみた妻もまた、手をあわせたいほどに尊くみえました。」

青木氏はこの一節に対し、“人間、生と死が限りなく近づいたとき、あるいは生きていながら100%死を受け入れたとき、井村先生のいう「レントゲン室を出るとき、私は決心しました、歩けるところまで歩いていこう」これは死を受け入れた瞬間だと思う…”と。そして、井村先生は最期

に「ありがとうございます。人の心はいいものですね。思いやりと思いやり。それが重なり合う波間に、私は幸福に漂い、眠りにつこうとしています。幸せです。ありがとうございます。ほんとうにありがとうございます。」というメッセージを遺されたそうです。

“ありがとう”的メッセージは、青木氏ご自身のご体験から語られています。青木氏が納棺師として働いている頃、かつて「親戚の恥だ！」と罵られ絶縁となった伯父様がこの世を去る前、気の重さを感じながらもお見舞いに行ったときの様子について、「伯父は温もりのある手で私の手を取り、柔軟な顔で涙を流しながら「ありがとうございます」といった。伯父もあらゆるもののが輝いてみえ、納棺師になりさがった私をも差別なく輝いて見えたのではないか…」と。青木氏は思いもよらぬ伯父様の姿に、手を握りながら涙が止まらなかったと振り返っておられました。伯父様との死別以降、今まで納棺の際に余り気にもならなかった亡くなった人の顔が気になるようになり、亡くなった方のお顔の綺麗さに気づかされたそうです。そして、 “自分の仕事を卑下しながら生きてきたこと、死に対する価値観も歪んでいたことに気づけたことから、死にゆく人はあらゆるもののが差別なく輝いてみえている、そんな世界に行くお手伝いをしていることができ、以来、誇りをもって納棺に携わることができた” ということをお話くださいました。

青木氏が最後に示された詩をご紹介します。

#### ＜いのちのバトンタッチ＞

人は必ず死ぬのだから  
いのちのバトンタッチがあるのです  
死に臨んで先に行く人が  
「ありがとう」と云えば  
残る人が「ありがとう」と応える  
そんなバトンタッチがあるのです  
死から目をそむけている人は  
見そこなうかもしれません  
目と目を交わす一瞬の  
いのちのバトンタッチがあるのです

青木氏のお話やこの詩にもあるように、人の死という場面を通して、逝く者・遺される者共々に最期に「ありがとう」というメッセージを交わし合い、

人から人への“いのちのバトンタッチ”を大切にしていきましょう。なお、講演会の中で紹介・販売された書籍を掲載いたします。

## &lt;講演の中で紹介された主な書籍&amp;販売した著書&gt;

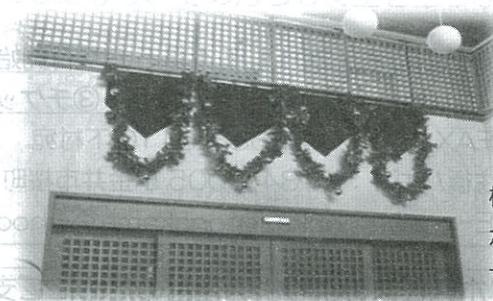
- ・『納棺夫日記』 青木新門 著 文春文庫
- ・『つららのぼうや』 青木新門 著 桂書房
- ・『飛鳥へ、まだ見ぬ子へ』 井村和清 著 祥伝社黄金文庫

**ホスピス点描**

ホスピスでのクリスマスの準備の様子をお伝えしたいと思います。カトリックでは、クリスマスの準備の季節として待降節というのがあります。4週間かけてイエス様の誕生をお待ちするのです。ホスピスでも、待降節の始まる頃に、クリスマスの飾りつけを行います。玄関には、お迎えするにふさわしい、希望の色である緑のモール（写真）、ラウンジにはツリーを飾ります。そしてボランティアさんによるプレゼントの準備も始まります。小さな心のこもったプレゼントとカードを準備します。毎年、色々と考えてくださいます。クリスマスのかわいい模様の小さなかわいい袋、クッション、ホスピスのロゴ入りタオル、箸入れの時もありました。今年も、いろいろ考え制作中だそうです。毎年恒例のビーズによるリース作りも始まります。細かい作業ですが、緑のリースに赤いヒイラギの実がアクセントです。かわいいベルが希望の訪れを告げているようです。カードもボランティアさん手作りのカードと、看護師が受け持ちの患者さまのために一言書いたカードを準備します。カードにも、時間というプレゼントが入っています。忙しい看護師が、患者さまに一言……。詩的な美しい言葉ではないですが、時間と心をこめたカードです。もちろんボランティアさんの手作りも、ひとつひとつ丁寧に作っていきます。

**ホスピス・コーディネーター 池田 順子**

待降節は、愛の行いの時でもあります。一針一針心込めて作っています。信仰をお持ちでない方が多いのですが、きっとその一針を、幼子のイエス様は喜んでくださると思います。日曜学校をしていたとき、小さな犠牲を子供達とし、紙のツリーに毎週飾っていました。馬小屋にお生まれになるイエス様のために小さなプレゼントとして紙のツリーを差し上げたのです。子供達は一生懸命イエス様が喜ばれることを考えました。同じように、ボランティアも看護師もスタッフは心を一つにして、患者さまの思いを大切にしています。クリスマスの準備の時も同じです。2010年のクリスマスは患者さまにとってはもちろん私たちにも一回限りのことです。だからこそ、私たちスタッフは一つ一つ丁寧に心込めて準備をするのです。キリスト者が、イエス様を心をこめてお待ちするように……。



様々な飾り付けで  
ホスピスのクリスマスを彩ります

**ボランティア日誌**

私たちのボランティアの日常の活動には、さまざまなものがあります。毎日行う活動と、曜日ごとに違うもの、それらが組み合わさって一週間が流れています。

私たちの火曜日では、月に一度「洋菓子づくり」をしています。患者さんやご家族の方のために、私たちが柔らかめのゼリーなどを手作りし、召しあがっていただくものです。先輩たちからうけつ

**ボランティア 野中 英子**

いだ「工夫されたメニュー」を中心にしながら、今では同じ曜日の仲間に声をかけ、季節の果物の使い方や、飾り付けの知恵などを寄せ集めて準備をします。また、新しいメニューを考える時は、菓子作りの本を参考に時折、自宅で試作してみます。でも、ゼリーが固まりすぎたり、固まらない……。挙げ句、家族に後始末を頼むことになり、呆れられてもいます。

それでも、何とか形になったものを、前週の火曜日に持参し、仲間に試食してもらいます。みんなからの遠慮のない率直な感想をもとに、さらに工夫を重ねます。そんなことを繰り返し、予定の作品を完成に近づけてゆきます。

洋菓子づくりにあたり、私たちが気を配っていること、心がけていることがあります。  
☆寒天を使わず、ゼラチンで代用する。  
☆グレープフルーツは使わない。  
☆一般なものより柔らかめに作る。  
などです。当日は、朝一番からゼリー作りかかり、

昼をはさんで形になっていくのを確かめます。そして、午後三時頃、看護師さんからただいた「今お届けできる患者さんのリスト」を観ながら、お部屋にお配りします。ゼリーを目にされた患者さんやご家族の方々の、驚きから笑顔に変わる表情に出会えるのは、私たちのよろこびです。

「ひとつずつ心をこめて丁寧に」を心がけ、そして「一口だけでもどうか召し上がるがれますように」との願いを込めて……第三火曜日の午後は流れています。

## 聖ヨハネホスピスのためのチャリティーコンサート ♪ 萩木のり子と谷川俊太郎をうたう ♪

◇主催:《風の仲間》◇

メゾソプラノ 保多由子/ピアノ 寺嶋陸也

2011年7月1日(金) 武蔵野市民文化会館小ホール (開場:18:30/開演:19:00)

全自由席 2,500円

〈曲目〉寺嶋陸也:「道しるべ」~萩木のり子の詩による歌曲集~ (2010年委嘱作品東京初演)

自分の感受性くらい/待つ/木の実/道しるべ/12月のうた 他

三善 晃: 一人は賑やか(萩木のり子) 林 光: 中歩くうた(谷川俊太郎)

武満 徹:「SONGS」より 一死んだ男の残したもの(谷川俊太郎)

※曲目は変更される場合があります

◆収益金はすべて社会福祉法人聖ヨハネ会に寄付され聖ヨハネホスピスのために役立てられます。

### チケット申込み方法(2011年4月5日受付開始)

①氏名(フリガナ) ②連絡先電話番号 ③チケット枚数 ④金額 を明記し、1~3のいずれかにて申込み

1. FAX : 042-388-0110 下村宛 (申込者のFAX番号明記)
2. 往復ハガキ: 〒184-0005 小金井市桜町 1-2-43 下村はるみ宛 (返信用に申込者の住所氏名明記)
3. E-mail : hpkazenonakama@yahoo.co.jp (申込者のアドレス明記)

### 聖ヨハネホスピスのよりよい運営のためにご支援ください

当法人は、ホスピスのよりよい運営のために皆様からのご援助をお願いしております。ご援助下さった方々には、今後この通信(年2回発行)を通してホスピスの「今」を連絡させていただきます。一人で多くの方がご援助下さることを心よりお願い申し上げます。

銀行振込 三菱東京UFJ銀行 小金井支店 普通 4127570  
口座名 社会福祉法人聖ヨハネ会

郵便局振込 口座番号 00190-7-711126  
加入者名 社会福祉法人聖ヨハネ会

※通信欄に「ホスピスのために」とご明記ください

〒184-8511 小金井市桜町 1-2-20  
社会福祉法人聖ヨハネ会本部事務局 TEL042-384-4403

### 【編集後記】

★暖炉に火を灯す冬のラウンジ。慌ただしい外界とは別の、変わらないものがあると実感じます。(S)

★ホスピスに関わり 10 年。同期も随分減りました。一人でも多くの人にホスピスケアをと願う 11 年目です。(N)

★新たにホスピスマインドを考えさせられる今日この頃です。(I)

【訂正】53号の5頁記載の「1)新人会員の懇親会」ですが、正しくは「1)新人会員の懇談会」です。訂正いたします。